

闇の奥

本書は「艦隊これくしょん」の二次創作小説です。

本書には一部登場人物の過激な言動、または艦娘の死を含む暴力・グロテスク表現が描写されることがあります。ご注意ください。

本書はフィクションであり、実在の人種、国籍、組織、人物、ゲーム、宗教、性別とは関係ありません。また作者はそれらの個人ないし集団を誹謗し、あるいはそれらに対する暴力を勧奨する意図を持ちません。

本書は日本国著作権法及び国際条約によって保護される著作物です。許諾なき再頒布については法 114 条の規定に基づく請求の対象となることがあります。

Reprinting without permission could result in criminal and civil liability.

目次【闇の奥】

「密偵」	5
「進歩の前哨」	23
「武人の魂」	64
「ある船の話」	124
「西欧人の目に」	199

“若者がたくさん加わっていて、たいていは士官室や食堂でだが、お互いに言ったもんだ—不謹慎な言葉は許してほしいがね—「こりゃあ糞みたいな戦争だな。けどでないよりはましだ」って。軽薄に聞こえるだろう？”

—ジョウゼフ・コンラッド

「密偵」

ベトナム共和国 サイゴン近郊 1971年11月

インドシナの昼日中は蒸し暑く、ベッドから見上げる天井ではけだるげに換気扇が回っていた。ウィラード・ギブズ中尉は開いたままの雑誌を放り出し、あおむけのまま枕の上に頭を落とした。

対日勝利二十五周年記念、「ライフ」の太平洋戦争特集。ベトナムネタに食傷した読者のために、古き良き時代の戦争の話をして目先を変えようというつもりらしい。鈍く重たい瞼の上
に手のひらを載せると、アデイおじのことが思い出された。寡黙な人で、声を出して笑うこと

も声を荒げて怒ることもない人だった。のに、思い返そうとすると浮かんでくるのは写真の中のおじの顔だ。ウィラード・シニア、ミス・ウィリアムズ（のちのミセス・ギブズ）、そして兄のアダム。愉快そうに肩を組み、屈託なく笑う三人の男女。訓練が終わって太平洋戦線に送られる前に撮った写真。

ギブズは包帯を巻いた手のひらを持ち上げ、じっと目を凝らす。日に焼け、張りを失い始めた肌。気が付くと、写真の中の父やアダムおじさんより年上になっていた。ウィラード・シニアはオリンピック作戦で戦死した。おじは、帰ってきたが二度と戦争前のように笑うことはなかった。そしておれは……包帯の下で、治りきらない傷が鈍く痛む。

「……ミスタ・ギブズ？」

ベッドサイドの電話が鳴る。片言の英語でフロントがなにか喚いていた。また何か文句か。半ばうんざりしながら聞いていると、フロント係は来客だと一方的にまくしたてて電話を切り、間髪をおかずに誰かがドアを叩いた。

「……開いてる。どうぞ」

枕の下で四五口径の撃鉄に指をかけたまま、ギブズはベッドの上で身を起こした。

「失礼します」入ってきたのは、一人の憲兵軍曹だった。「ウイラード・ギブズ中尉ですね」

「そうだが」

銃に安全装置を掛けながら、ギブズは答える。プレスの効いた野戦服にはち切れそうな体を包んだ憲兵は、無精ひげの浮いたギブズの顔、クズかごの中に転がった酒瓶、割れたままの鏡をいぶかるような職業的警戒心をもって順繰りに見回し、最後にギブズに視線を戻して敬礼した。

「召集です。ご同道願います」

「わかった。服を着る」

皺だらけのまま床に転がっていた野戦服に袖を通し、ベレー帽の埃を払う。憲兵は士官に対する分をわきまえて無言のままじっと立っていたが、時折ぎよろりと動く目が、こういった乱

雑さには我慢できないたちであることを物語っていた。

「よろしいですか？」

「……待ってください」

迷ったが、手の包帯は外すことにした。血はもう止まっている。ギブズは外した包帯をテーブルの上に置いてあつた鏡の破片に巻きつけると、ポケットに突っ込んだ。

「……なんですか、それは」

初めて好奇心をあらわにしながら、憲兵がギブズの腰に手挟んだ四五口径と、鏡の真ん中に開いた銃痕を交互に見比べる。説明して理解してもらえとも思わなかったが、ギブズは端的にかいつまんで答えた。

「俺が撃って、俺が弁償した。俺が買ったんだから、俺が持つていく」

「……はあ」

憲兵はそれだけ言って、あとは口を閉じていた。

アンプのいかれたロックンローラーが絶叫するようなジェットエンジンの金切り声。緑色の翼に鈍く熱帯の太陽を照り返しながら、輸送機が入れ替わり立ち代わり滑走路に降りては空へ上がっていく。合間合間に飛び立っていくヘリコプターが赤茶けた土ぼこりを巻き上げる。灯油の燃える匂い。タンソンニュットもめつきり寂しくなったものだ。ボンネットに足を乗せてジープの助手席で揺られながら、ギブズは指先でくるくると黒いベレーをもてあそぶ。ギブズが初めて派遣されたころには本土から若者を運んできては、琉球リュウキウに死体袋を運んでいく輸送機の波が引きも切らさなかったものだ。ニクソンは本当にこの戦争をたたむつもりだろうか。

「こちらです」

MACV司令部の一般兵士立ち入り禁止区画の一角。何も表示のないブラックの前にギブズを降ろすと、憲兵軍曹の運転するジープは急ぎ足で走り去った。厄介ごとにも頭のおかしい海軍フネクイターの蛇喰い野郎の気まぐれにもこれ以上かかわりたくないと言わんばかりだ。

「ワイラード・ギブズ中尉、出頭しました」

「楽にしろ」

ノックしてドアを開ける。バラックの中はエアコンが効いていた。

「よく来てくれた、中尉」

海軍部隊顧問グループのコンラッド大佐には見覚えがあった。前に見たときは中佐だったが昇進したらしい。執務机を挟んで大佐の向かい、応接椅子に座っている二人の平服の男の正体は見当がつかなかった。

「こちらはC I Aのエージェント・ジェイクとエージェント・エルウッド」

……C I A。内心で舌打ちしながら、二人のC I A係官を見比べる。小太りで小柄な男と、大柄だが痩せた男。体格だけは対照的だが、二人ともこの熱帯でご苦労なことにそろいのダークスーツを着込み、黒いソフト帽にサングラスまでそろいのウェイファラーをかけている。紹介された名前がファーストネームなのかそうでないのかよくわからない上に、顔もよく区別が

つかないので、ギブズは心の中で勝手にこの二人をブルックス・ブラザーズと呼ぶことにした。

「よろしく、ギブズ中尉」

「資料は拝見したよ。ラオスでは大変だったな」

「……小職はラオス国内に足を踏み入れたことはありません」

「ほんとうかね？」

「そのような事実はありません。……事実だとしてもお答えできません」

ギブズが真顔をつくって白々しい嘘を述べ立てると、ブルックス・ブラザーズは互いに顔を
見合わせて深くうなずいた。

「素晴らしい」

「まさに適任だ」

「……そちらは？」

部屋にはもう一人がいた男。ギブズは今まで一言も話さず、壁にもたれて煙草を吸っていた

男に水を向ける。ブルックス・ブラザーズよりはまともな背広を着ていたが、その身なりには何か違和感があった。

「自己紹介するかね、大佐」

「そうしよう」

コンラッドに水を向けられた男は壁を離れ、くゆらしていた紙巻を灰皿でもみ消した。

「GRUのミハエリス一等海佐だ」

「GRU？」

ソ連軍参謀本部情報部。CIAだけでも十分成り行きが不穏なのに。なんて日だ。心の中で天を仰ぐ。

「なぜロシア人が？」

「ソ連市民、だ」ミハエリスが穏やかに訂正する。「私はハールキウの生まれでね」

米語はうまく、スラヴ訛りはほとんどないが、故郷の名を口にするときだけわずかにウクライ

ナ語のアクセントを強調していた。アメリカ生まれでも違和感なく通じるだろう。

ミハエリスがにやにやと笑っていると、コンラッドが割って入った。

「順を追って説明しよう。食事はまだだろう？」

一同は作戦室の一隅に用意されたテーブルを囲んで座った。ミハエリスは食事の最中でも煙草を手放す気がないらしく、マルボロの甘い匂いが漂っていた。アメリカ煙草を自由に入手できることは海外勤務の役得なのだろう、とギブズは推測した。アメリカ側の同僚がハバナ産の葉巻を珍重するのと一緒だ。

「幽霊艦隊ゴーストについて聞いたことは？」

「噂程度には」

テーブルの真ん中、大皿に乗せられたターキーをゲストにとりわけながら、コンラッドが言った。そういえば感謝祭の時期だった。缶入りの克蘭ベリーソースはあまり好きではな

かったが、ギブズは黙っていた。

「噂ではない」円盤状にスライスされたベリー・ジェリーをフォークでつつきながら、エルウッド・ブルックスが言った。「損害は確実に出ている。現時点では何とか本土の連中に騒がない程度には収まっているがね」

「……破壊工作サボタージュでは？ 東側の」

「こうして本物のアメリカ文化に触れることができるのはまたとない学びの機会ですな」

点々と赤いソースのかかったターキーを一口飲み込むと、ミハエリスはギブズの発言に気を害したふうもなく楽しそうに笑った。

「残念ながら我々の手のものではない。そうであれば良かったのだがね。我々の潔白は同志エルウッドが裏書きしてくれるはずだ」

「我々だけではない。ソ連の船舶にも被害が出ている。手段はお教えできないが、同志一等海佐の言っていることは真実だ」

「ラングレーの写真偵察機隊は優秀ですな」ナプキンで口元を拭いながら、ミハエリスがくつくと愉快そうに笑う。「私も写真は拝見したことがあるが、わが方にも欲しいくらいだ」

「ここは互いの実績を非難しあう場ではない。そんなことどもはマンハッタンにいる連中に任せておけばいい」

コンラッド大佐は料理を申し訳程度につつただけで皿を押しやると、コーヒーを取りに立ち上がった。

「我々はお互いにプロフェッショナルとして共通の脅威に対処せねばならん。要るかね、中尉」ギブズが手をふって断ると、コンラッドは一同にコーヒーを回し、自分のカップにはなみなみとウイスキーを加えた。

「共通の利益に奉仕する、といったほうが正確では」

「利益とはいささか資本主義的ですね」

どうでもいい。共通の利益だが脅威だからしらないが、コンラッドやミハエリスのような連中

が汚れ仕事をやるわけではない。半ばしらけながら、ギブズはパサパサするターキーの胸肉を酸っぱいベリーのソースで流し込むように呑み込んだ。汚れ仕事をやらされるのはこの俺だ。
「それで、自分は何のために呼ばれたのですか」

「核心をつく質問だ」

「そろそろ本題に入ろう」

隣に座っていたブルックス・ブラザーズがサングラス越しにギブズのほうをのぞき込んだ。イラつかせる連中だ。CIAの椅子磨き屋ども。自分は大学で心理学の修士号をとったから他人の心が読めるし、会話の流れも掌握できると思っている。

「開けてみたまえ、中尉」

ジェイク・ブルックスが、テーブルの上にマニラ紙のファイルを置く。封緘を開け、中を開いてギブズは不審に目を細めた。

「帝国海軍？」

「そうだ。それが我々の脅威だ」

帝国海軍。四半世紀も前に滅びた帝国の艦隊。熾烈な本土決戦の中で艦船の最後の一隻、航空機の最後の機までを消耗し息絶えた、今は亡き国家の海軍。かつてギブズの父やアダムおじさんが戦った敵。

「バシー海峡での輸送船の損失から地中海、ヨーロッパにおける港湾襲撃まで」

「『幽霊』と通称される、世界各地での海洋交通路に対する未知の脅威の正体は大日本帝国海軍の残党であると、我々は推測している」

しかし、なぜ。二十五年もたって、一隻のフネも持たないはずの海軍が、どうやって、何のために？ ギブズの困惑を見透かしたかのように、テーブルを挟んで正面に座っていたコンラッドが言葉を継いだ。

「戦争末期の帝国海軍は、様々な方法で人間を兵器化する方法を模索した。その究極形の一つが、武装した人間をそのまま海の上に浮かべて戦力とする『軍艦人間』コンセプトだ」

なんてことだ。ファイルの中身を一枚一枚めくりながら、ギブズの背中が粟毛立つ。不鮮明な写真。生存者の聞き書き。何も無いところから現れた魚雷に襲撃される輸送船。陸地を遠く離れた洋上で目撃される人影。そして、撃沈された船から行方不明になったはずの人間が、別の場所でもた「海の上を歩くようにして」目撃される。まるで怪談話だ。人間が、海に引きずり込まれて軍艦になってしまふなどと。

「幽霊……」

普通の、まともな教育を受けた軍人であればそんなものを真に受けはしない。けれどギブズには覚えがあった。ほかならぬ、アダム伯父から聞かされた「バシー海峡の幽霊」の物語。

「連中がどのような手段を用いたかの全容は判明していない。しかし幸か不幸か、現時点ではその活動能力には制限があるようだ」

「我々の情報は、カレー洋からフィリピンにかけての幽霊艦隊の活動が『河津大佐』^{カワツ}なる人物によって指揮されていることを示している」

吸いつけられたようにファイルを眺めているギブズに、ブルックス・ブラザーズは交互に話し役を交代しながら説明をつづけた。

「河津大佐はマラッカ周辺、ないしカレー洋東部のどこかに潜伏し、東南アジア周辺海域における海洋テロ行動の活発化を企図している」

「そこでだ」

ギブズは資料から目を上げた。コンラッド、エルウッド、ジェイク。三組の顔が、テーブルの上で手を組んだままギブズを見ている。

「君の任務は河津大佐を抹殺し、幽霊艦隊によるこれ以上の活動を抑止することだ」

抹殺。エルウッドが口にした言葉に違和感を覚えて、ギブズは眉をひそめた。「無力化」だの「排除」だの「不能」だの、もって回った言い回しを好む連中にしては直截な言い回しだ。

「……それで、そのカワツ大佐とかいう男はどんな奴なんですか」

渡された資料には河津大佐のことは何も書かれていなかった。その名前をのぞいて。

「ウイラード・ウイラードヴィチは旧弊な人間だな」ギブズがファイルを閉じてテーブルの上に置くと、隣でコーヒーにいられた砂糖をスプーンでかき回していたミハエリスがぐぐもった笑いを漏らした。「帝国主義国家ではどうか知らないが、進歩した世界ではすでに男女は区別なく同じ舞台に立っているのだよ」

愉快そうに笑いながらミハエリスは甘いコーヒーを一口すすり、カップを置いた。

「同志諸君に贈り物を持ってきた。我らが友人、河津大佐の入手可能なもつとも最近の写真だ」
ミハエリスがテーブルに置いた、ミノックスのフィルムを引き写したと思しき粒子の荒い写真。そこに映っていたのは。

「女……?」

「そうだ」

コンラッドがうなずいた。髪の毛の長い若い女。やや落ちくぼんだ目に疲労の色を見せているが、東洋人が若く見えることを頭に入れても、ギブズよりもさらに若く見えた。十四、五歳……ど

う見ても二〇歳を超えているようには見えない。

「これはいつ撮られたものですか」

「三年前だ」

「しかし、彼女は……」

「そうだ。若く見えるが、その容姿に眩惑されてはならない」

「我々は四半世紀来彼女の、彼女たちの足取りを追っている。彼女たちは」

「帝国海軍の軍艦人間コンセプトには奇妙な欠陥があった。若い、未婚の女にしか兵装が適合しない」

「そのため、彼女たちは日本語で若い女を表す『ムスメ』と、軍艦を示す『カン』を組み合わせさせてこう呼ばれた」

「『カンムス艦娘』」

艦、娘。カンムス。その言葉を反芻しながら、ギブズは写真を手に取り、じつと見る。撮られたとき

にちょうどカメラのほうを見返していたのか、写真の中のその女がギブズの目をじつとのぞき込んでいるかのように感じられた。

「我々が河津大佐と呼んでいるその若いレディは」ミハエリスは口元から笑みを消し、自分自身に言い含めるように呟いた。「……かつて『瑞鶴』^{スイカク}と呼ばれた第一世代の艦娘だ」

「進歩の前哨」

タイ王国・ウタパオ海軍基地南方洋上　タイランド湾上空　1971年11月

「降下地点まで10分です、中尉。準備を」

ロードマスターがインカム越しにがなる。ギブズはうなずき短く了解を返す。酸素マスク、パラシュート。防水梱包された装備。赤外線フィルターをかけたストロボライト。戦術ビーコン。すべて問題なし。

カレー洋上の空母に運ばれる郵便物を背にして座りながら、ギブズはヘルメットの下に走る額の傷跡を撫でる。髪が伸び、頭の手術痕は目立たなくなっている。みみずのように盛り上

「60秒前です」

インスターカム

機内通話のプラグを外して立ち上がる。パラシュート、パレットに積まれた貨物コンテナ。

酸素マスク、酸素ボトル、最終確認。問題なし。問題があっても死ぬだけだ。ロードマスターが指を折る。カウントダウン。3、2、1……

「幸運を」

ロードマスターが親指を立てる。サムズアップを返し、ギブズはコンテナを闇の向こうへと蹴り飛ばす。そして己自身を虚空へと躍らせた。

HALOジャンプは好きだった。特に夜間のそれは。自由落下が始まった瞬間、落ちているとも浮かび上がっているともつかない空間意識失調がギブズを襲う。ただヘルメット越しに耳を切る冷たい空気と、ぐるぐるとヒステリックに回転する高度計の夜光盤だけが、ギブズの体を浮上ではなく落下していることを教えてくれる。闇への根源的な恐怖と戦いながら、計器を信頼し、計器を信頼する自分自身を信頼する。その自分自身が試される時間が、好きだった。

並んで降下していたコンテナが、ふわりと浮かび上がる。間髪を入れずに、衝撃とともにパラシュートハーネスがギブズの体を締め上げる。心地よい思索の時間はあまりにも早く過ぎ去り、ギブズはぶらぶらとパラシュートにぶら下がって降下する。肉眼では見えないようにIRフィルターの掛けたストロボライトを点灯させる。眼下に広がっている水面はどこが海やら空やらわからないが、向こうのほうでギブズを見つけてくれるはずだ。

パラシュートを操作してらせん状に緩降下させながら、高度計に目を凝らす。水面が近い。ほのかに生臭い海水の匂いが鼻を突く。水音。先にジャンプしたコンテナがわずかに下方で着水する。脚を交差させて着水に備えた瞬間、ギブズの、体は生暖かい海水に叩きつけられた。淀んだ海面が、二階からコンクリートの上に飛び降りたように感じられる。

「……はっ……」

水中に沈みかけた体からパラシュートを切り離し、浮かび上がる。高高度降下で冷え切った体に生暖かな海水が心地よい。数メートル離れたところに漂っていたコンテナに泳いでたどり

着くと、しばし体を預けて息をつく。緊張の緩んだ膀胱から、生暖かい尿がズボンの中に流れ出す。冷え切つて縮こまっていた一物の存在を思い出し、ギブズは一人勝手に笑みを浮かべる。

風上の方の水面でぼっと赤くなにかが光ったかと思うと、内燃機関の唸り声が静まり返った海に響き渡った。航行灯もつけずに夜光虫の青白い波を蹴立てて近づいてくるそれが、だんだんと闇になれた視界の中で形を成す。ボートはぶかぶかと漂うギブズの方に数ヤードのところまで近づくと、エンジンを切った。赤いフィルターのかがつた薄明りに照らされて、操舵席に人影が見えた。ホルスターの9ミリ拳銃に手をかけながら見守るギブズの前で、人影はゆっくりとマッチを擦り、パイプ煙草に火をつけた。手筈通りだ。

「リトル・ゴブリンへようこそ」波間でゆらゆらと揺蕩うギブズを見下ろしながら、人影は小声でささやいた。「船長のマールロウだ。乗船を歓迎するよ、ミスタ・ギブズ」

夜が明けるころ。ギブズは海水でベタベタする尻を船尾に据えて、引き上げた装備を改めて

いた。明るい光のなかで見る「小鬼」^{リトル・ゴブリン}は、第二次世界大戦の時代に作られたエルコ社製の魚雷艇だった。JFKが乗っていて、日本海軍の駆逐艦に真つ二つにされたのと同じ、ベニヤ板づくりの小舟だ。今は魚雷も対空機銃も下ろされ、往事を忍ばせるものといえは操舵席の前につけられた頼りない木製の簡易魚雷照準儀くらいしかなかった。代わりに固縛されたドラム缶やまだらの緑に塗り直された塗装さえなければ、どこかの港で遊覧船として余生を送っていても不思議ではない……そんなギブズの空想をよそに、快調にガソリンの排気煙をたなびかせながら「小鬼」は朝のタイランド湾を快調に走っていた。

コンテナの中身を確認し終わると、ギブズはふうと息を吐いた。万事問題ない……今のところは。パラシュートに絡まっておぼれ死ぬことも、浸水したコンテナパレットと一生に海に沈むこともなかった。

「どうぞ、中尉」

船尾から遠く航跡を眺めていたギブズの方に、誰かがアルミのカップを差し出した。

「砂糖をお入れになるかわからなかったのでブラックのままですが……よかつたら」

粉末コーヒーの快い香りが鼻をくすぐる。軽く頷いてギブズがカップを受け取ると、その若い乗組員は尋ねられるまでもなく自己紹介を始めた。

「クラーク。ジェイムズ・クラークと言います。ジムと呼んでください」

ギブズが黙っているのを好意か、少なくとも中立的な無関心と見たのか、ジムは同じくコーヒーの入ったカップを手に向かいに座った。

「よかった。この船、自分以外にコーヒー党がないんですよ。船長は紅茶党だし、KJは朝からビールばかり飲んでるし」

咎めるように目を細めながら、ジムは操舵席で舵輪の前についている大柄な黒人の方を眺めた。ジムの言う通り、足元にへしゃげたクアーズの空き缶が転がっている。腰に下げたークォート水筒の中でウォッカがたゆたっている身としてはいちいち気にするほどのこともなかったが、ギブズは形ばかりの賛意を示してうなずいた。どのみちクアーズよりハイネケンの緑瓶の

ほうが好きだ。

マーロウ船長、K J、そしてジム。「小鬼」の乗組員はその三人だけだった。武装も何も積まないまま、沿岸でCIAの下請け仕事をするだけであれば往事のような一個分隊の水兵は必要ないのだろう。今も積み荷といえは、得体のしれない海軍の特殊戦隊員と身の回り品だけだ。

ギブズが黙っているのをいいことに、ジムは勝手に身の上話を始めた。中西部の海のない町で生まれたこと。大学を休学して、平和への義務感から（あるいは、海へのあこがれから）海軍に志願したこと。ベトナムで見た現実に失望して、軍を脱走したこと。マーロウ船長に拾われて、今の仕事についたこと。

話し相手ができてうれいいのか、訥々としやべるジムに、ギブズは内心の軽蔑が表れないように押し黙ってうなずいていた。理想に燃える愚か者。「自分探し」をすると称して、いつまでも子犬のように自分の尻を追いかけている。そうして結局、こんな僻地でCIAに尻を売る羽目になっているのだ。

「ロード・ジム
ジムの旦那！」

操舵席のK Jが、半ば怒声のようなドラ声を張り上げて、船尾にいる二人を振り返った。その何処か揶揄するような敬称が、彼がジムを呼ぶときの決まりらしい。その礼儀正しい仰々しさが妙にしっくりとして違和感がなかった。

「船長が客人をお呼びだ。海図室までお越し願え」

「ご馳走様」

ギブズは空になったカップをジムへ押しやり、腰を上げた。

海図室、と大層な名がついた、操舵席のある狭いブリッジから一段下った一角で、マーロウ船長が待っていた。

「今後の航程を説明したい。ミスタ・ギブズ」

長年潮風を吸ってしわがれてはいるが、他人に指示をすることに慣れた男のよく響く声だっ

た。天窓から差し込む朝日の中で改めて見る船長は、長年熱帯の陽光にさらされ日焼けした肌に刻まれた皺のせいで年齢が判然としない。ジムやKJら、若い乗組員とは違っていかにも船乗りといった潮気のある風貌だった。ことによると、石炭焼きの貨物船の時代から船橋に立っていたと言っても通りそうだ。かすかに残るイギリス訛りも、海洋小説の登場人物を思わせる印象を強めていた。

「本船はこれからスンダ海峽を抜けてペナン沖に向かう……ここだ」

ギブズが海図台の傍らに立つと、船長は現在位置がプロットされた海図を指し示しながら説明を始めた。

「スンダ？ マラッカをそのまま抜けないのか？」

「マラッカは大型船が多い。シンガポール近海で人目につくのは避けたい、と荷主からの仰せだ」

船長の太い指が海図の上を走る。視線で追いながら、ギブズはブリーフィングを復唱する。

情報提供者と接触し、標的の所在地に関する情報を更新したのち、初期の目的を達成せよ。

「委細は船長の指示に従うこと、だろう」

ギブズの思考を見計らったかのようなタイミングで、船長が皺の寄った口角を持ち上げて笑う。ギブズは肩をすくめて頷くしかなかった。

「アイ、キャプテン」

「よろしい」

我が意を得たりとばかりにうなずき返すと、船長は海図に視線を戻した。

「確かに遠回りになるが、かかる時間に関しては君を送った荷主も了承済だ」

「航続距離は？ 足りるのか」

「何度かスマトラ西岸で燃料補給をする必要があるが、今の本船は戦時中より身軽だし、予備燃料も積み込んである……ここまでの遠出は久々だが、ミスタ・パッカーも寄る年波の割には機嫌がいい。ミスタ・ジャンドはああ見えて優秀な機関士エンジニアでな」

そういつて、船長は操舵席のK Jの方を振り返り、不器用に片目をつぶって見せた。

「ああ、言い忘れたが操舵席よりも船尾側では煙草を吸わないでもいい。停船中もだ」

「煙草は吸わない」

「結構」

「他には？」

「ベッドは船首の士官用を使ってくれ。食事は一日四度。トイレは……残念ながら故障中だ。

船尾の渡し板で済ませてくれ」

「パンツの中でしなくて済むだけありがたいね」

からからと船長は笑った。冗談だと思っただけらしい。

「小鬼」は二度名前のしれない波止場に立ち寄って航空用ガソリンをたらふく詰め込み、夜は明かりのない島影で眠りながら、カレー洋の蒼い波を蹴立ててスマトラ沿岸を巡航速度で進

んでいた。スンダ海峽を渡る時に、非番だったジムが海峽の島にあるなにか有名な火山についてはしゃぎながら語っていた以外、特筆すべきことは何もなかった。「蒸気船マーク・トウエイン号」と変わらない平穏な航海だった。

「小鬼」の面倒はマールロウ船長以下三人の乗組員が万事取り仕切り、ギブズは何も手伝うことがないまま時間を持て余していたが、退屈には慣れていた。厳密に言えば、退屈なルーティーンの中で緊張を維持するのが、ギブズの職業だった。塩気の混じった沼を何十マイルか歩き、腐った落ち葉の上に寝そべてまた何日か待つ。そしてペンタゴンの誰かが地球上にいてほしくないと願った奴の息の根を止めると、自分の排泄物で重たいパンツを引き上げて帰るのだ。それが人生だ。その他いろいろ。

「……ズイカク」

マガジンの弾をすべて出し、バネの具合を確認しては弾を込め直しながら、ギブズはぼつりと目標の名前を呟いた。弾倉をライフルに装填し、膝の間に挟むと、防水布の中からファイ

フォルダーを取り出す。写真。人と軍艦、双方の。空母瑞鶴。幸運の？ 縁起のいい？ なんともしたい名前を持った優雅な鳥。パールハーバーを爆撃した航空母艦、その最後まで残った一隻。その艦の名前を持つ女。

四半世紀も前に沈んだはずの亡霊。引き延ばされて粒子の荒い写真の中の彼女は、もの悲し気に見えた。標的の写真は大体そう見える。貨車に載せられる牛と同じだ。当人は知らない運命を、ギブズの側は知っているからそう見えるのだ。

フォルダーには、几帳面に切り抜かれた雑誌のページや新聞記事のスクラップが挟まっていた。バシー海峡で貨物船が謎の被雷。コモンウェルス 大和自治領 近海で、哨戒艇が行方不明。アリユーシャンでサンマ漁船が消息を絶つ。演習中の潜水艦が謎のソナー音を受信。苦笑しながら、ギブズはフォルダーを閉じて防水布の中に戻した。幽霊艦隊？ 明るい光の中で見ると、確かに馬鹿馬鹿しい話に思えた。

「ミスタ・ギブズ？」

目を上げると、マーロウ船長が立っていた。丁重かつ威厳に満ちたマーロウ老船長の声を聞いていると、まるで自分がユナイテッド・ステーツの一等船客デッキで日向ぼっこでもしているような気分になる。

「日没までに本船は『ハグロ・ホテル』に到着する」

「ハグロ・ホテル？」

「前哨地点だよ。地元の連中はそう呼んでいる。そこで君を情報提供者に引き合わせる」
火のついていないパイプを黄ばんだ歯の間に啞えたまま、船長はにやりと笑った。

「喜べ、今夜は揺れないベッドの上で眠れるぞ」

そういう船長は、夜になると海図室の真上にハンモックを吊って寝ているのだ。揺れない地面の上に立ったらまともに歩けるか怪しいものだ。

マレーシア ペナン州近海某島「ハグロ・ホテル」 1971年11月

黄身のつぶれた目玉焼きのような形の太陽が暗い水平線に溶けていく頃、「小鬼」は波止場の明かりを指してすべるように進んでいた。水面は波ひとつなく、黒いガラスでも敷き詰めたように静まり返っていた。

夕闇の中にぼんやりと黒く浮かび上がる島陰に近づくにつれ、船の姿が増えてくる。帆かけのジャンク船、舢、錆の浮いた貨物船……払下げ品か、古い米軍の機動揚陸艇の姿も見える。波止場にごった返す雑多な船の間を縫うように操船しながら、船長は「小鬼」を棧橋の方に寄せていく。甲板で忙しく立ち働いていたジムとKJが棧橋に立っていた浅黒い男たちの方へ網を放ると、エンジンを切った艇は静かに棧橋に横付けした。

「もう少し静かなところかと思っていたが」

「そうか？」

ギブズが想像していたのは、ヤシ林を切り開いた中にぼつんと監視小屋が立っている、小さな中継所だったが、間近で見ると見るハグロ・ホテルは小さな港町の感があった。砂浜のそこかしこに空き缶で作った間に合わせのカンテラが焚かれ、揺らめく赤い炎が行きかう男たちの雑多な顔をぼんやりと照らし出している。

どこかで料理をしているのか、風に乗ってくたびれた油でいためたタマネギとニンニクの匂いが運ばれてきた。空腹という基本的な欲求を我慢しきれなくなった人間をおびき寄せ、手っ取り早く満足させるための、中華料理ともイタリア料理ともつかない根無し草料理の匂い。どこの港町の裏通りでも嗅げる匂いだ。

「船には燃料が、人には情報が必要だ」

棧橋にいた男とマレー訛りの英語で二言三言交わっていた船長が、警戒するようにあたりを見回していたギブズの方を振り返った。入港手続きはそれで終わりらしい。

「それに——」

船長が何事か言いかけた瞬間、バタバタと耳障りな轟音が日の落ちた海面の方から響いてきた。

「ッ……?」

反射的に頭を下げ、ライフルに手をかけたギブズの頭上を、腹に赤い星をつけた茶色のヘリコプターが海面を波だてながら通り過ぎていく。船長はといえば、擦り切れた船員帽が飛んでいかないように押さえながら、悠然と頭上を通り過ぎたヘリコプターが波止場の奥、ヤシの木を組んで作った発着場に降りていくのを目で追っていた。

「……なぜソ連軍が?」

「ロシア人だって飯を食うさ。資本論じゃ腹は膨れないからな。さあ、上陸しよう。その物騒なものは置いていってくれよ」

「小鬼」にジムだけを残して、船長、K J、そしてギブズの三人が艇を降りた。ライフルは

置いていくことにして、拳銃だけズボンの後ろに手挟んだ。身軽な姿のギブズの傍らで、K Jはなにやらかさばるものが入った、年代物のダツフルバッグをいかにも大事そうに船から降りていた。

「商品さ」

K Jは身長6フィート強の屈強な黒人で……古いV型エンジンの扱いに長けていた。ギブズはどちらかといえば、何かと世話を焼くようにまとわりついてくるジムよりも、K Jの世慣れた寡黙さの方に落ち着きを感じていた。エンジンの番をしていない時にのべつ幕なくふかしている、手巻きのマリフアナ^ジ煙草^ョの匂いを除けば、であるが。あれはひどい匂いだった。他に欠点らしい欠点といえば、常にビールの缶を手に、酩酊することもない代わりに素面でいることもないことぐらいだったが、その点はギブズも同類だった。

「おたくの会社^{カンパニー}の仕事のついでに、皿にもう一品増やそうと思ってな」

秘密めかしてウインクしてみせるK Jは、いつになく上機嫌だった。事実、エンジン整備と

並ぶK Jの特技は料理だった。「小鬼」の狭い台所で、あるいは船首甲板にしつらえた固形燃料ストーブの上で、K Jはさきやかな冷蔵庫の中身をさまざまな保存食を組み合わせて補いながら、ある日の朝はベーコンエッグにパンケーキ、ある日の夜は炊いた米に野豚肉の煮込みと、なかなかバラエティに富んだ料理を食卓に供するのだった。

棧橋から降りて、三日ぶりの揺れない土を踏む。船荷を積み下ろしする沖仲仕たちの怒声めいたやり取り。小屋の中で酒とともに酌み交わされるささめき声。どこかから、酔った海の男の懷で一緒に温まろうとする女たちの嬌声が夜風に乗って流れてくる。中国語、マレー語、英語、スペイン語、フランス語、ロシア語、日本語……雑多な言語で交わされる喧騒をよそに、ギブズはK Jと船長の間に挟まれるようにして浜辺を歩いていた。

「ハグロ・ホテルか」

ギブズが独り言ちるようにその名前を口に出すと、K Jが無言のまま振り返った。

「あれだよ」

後ろを歩いていたマーロウ船長が、顎でけたたましい騒音を立てている一角を指し示した。トタン板で囲われた照らされたスクラップの山に男たちがとりつき、せわしなくブロートーチとグラインダーで屑鉄と戯れている。

「この島の少し沖に、日本の巡洋艦が沈んでいる。最初はこの辺りの漁民が素潜りで金目になりそうな廃材を拾っていたんだが……いつの間にか、一大産業になっていた。金が集まれば人が集まる。逆もまたしかりだ。ああ、着いたよ」

船長は砂浜に乗り上げたまま崩れかかっている古い貨物船の前で足を止めた。ほとんどが赤錆で覆われた船首には、キリル文字とラテン文字で白く船名が記されている。消えかかった文字はザスタヴァ・プログレス、と読めた。

「『進歩の前哨』とかいう意味らしい。もう20年くらいここに鎮座しているよ」

ソ連船だろうか。波止場の猥雑だが活気にあふれた喧騒から外れて、打ち捨てられたサーデインの缶詰のように転がっている姿は、皮肉な郷愁を誘った。労働者の祖国から進歩の名を

背負って送り出されてきたときが、この船にもあったのだろうか。「進歩の前哨」号の舷側に降ろされたままの階段を上ると、船長は勝手知ったるとばかりに船尾楼甲板に上がり、開けたれた水密扉をくぐった。

「こんばんは、ミスタ・ヴァーロック」

「ごきげんよう、マールウ船長」

船橋の一階層下にある一角。裸電球の心もとない明りに照らされた部屋の中、腫れぼったい目をした恰幅の良いヨーロッパ人の男が座っていた。往時は船長公室か何かだったのだろうか、それらしく応接椅子などが置かれているが、本、雑誌、新聞、何が入っているとも知れない紙箱……部屋の中に乱雑に積まれた小間物のせいでいかにも手狭な印象に見えた。部屋の中に張り渡されたロープに洗濯ばさみで止められた写真に、ギブズは目を止めた。女の写真……まるで裏通りのポルノショップといった印象だ。

「ステイーヴィー」

ヴァーロックと呼ばれた男は、机の向こうに座ったまま、傍らに控えていた若い男を促す。顎の周りをようやく薄い金色の毛が覆いだした、子供と言ってもいいくらいのその男は、のろのろとKJの前に進み出て……ダッフルバッグを受け取った。

「レコード？」

「そうだよ」

ケースの中から出てきたのは、箱のあちこちが擦り切れた、中古品のレコードだった。意味ありげに口角を持ち上げて、KJは目くばせする。

「ロシア人だってジーンズも履けばビートルズも聞くさ」

「最近ではソ連でもビートルズは飽きられがちだ……これはなんだ？ サンタナ？ 誰だ？」
「去年出たばかりのアルバムだぜ」

ヴァーロックはケースの中身を机の上に広げ、一枚一枚検め終わると、空のバッグだけを再びステイヴィーに持たせてKJに返した。ギブズは頭の中で、襟に赤いスカーフを巻いたイ

ヴァン・イヴァノヴィッチがママに隠れてローリングストーンズを聞いているところを想像しようとしてみたが、どうにもうまくいかなかった。

「白人^{ホワイト}どもがチャック・ベリーからロックンロールを盗んだんだ。少しは還元してもらおうさ」

「ロシア人は見返りに何を寄越すんだ？ ショスタコーヴィッチか？」

「色々さ、食料、情報……武器もだ。あんたのお仲間^{カンパニー}が、引き金を引くとチャーリーの指が吹き飛ばように細工してばらまくためのカラシニコフとかな。表で飛んでいたヘリだって売ってくれるぜ」

愉快そうに笑いながら、KJは軽くなったダッフルバッグを肩にかけた。ビジネスの会話はそれで終わったようだった。

「私とミスタ・ヴァーロックは天気の話をする。ミスタ・ギブズ、君は……」

「ステイーヴィー、彼女のところに案内してやれ」

船長とミスタ・ヴァーロックを船室に残し、ギブズはステイヴィーとKJに伴われて更に船尾楼甲板の一層下に降りた。通路は切れかけた電球がまばらに照らしているだけで薄暗く、足元がおぼつかない。通気の悪い船内はむっとする湿気の中に錆と機械油の匂いが充満して、陸ににいるのに船酔いしそうだった。その後ろをついて歩きながら、ギブズはヴァーロックとステイヴィーの関係をいぶかった。親子というには齡が近いし、兄弟というには離れている。そもそも血縁者にしては似ていない。まえを歩く男は、顔立ちこそそれなりに整っているが、時折どもりながら言葉のようなものを口にするだけで、お世辞にも生き馬の目を抜くような辺境で無法者相手に商売をするような、世知に長けたタイプには見えなかった。

「ハ、ハ」

先ほどまでギブズたちがいた船室の真下でステイヴィーは足をとめ、扉をノックした。返事を待たずに、若い男は扉を開ける。作り付けのベッドと机がしつらえられただけの、殺風景な部屋の奥。ベッドの上に女が座っていた。

「……どういことだ」

女、というのは正確ではなかった。立ち上がったっても5フィートに満たないだろう。プラチナブロンドの髪をした少女。スクールバスに乗って小学校に通っていてもおかしくない、小さな子供がベッドの縁に腰かけている。着ているものといえば、下履きの上は頼りないほどに薄いスリッパ一枚だった。

「ふぎけるな！」

その少女が物憂げに自分の方を見た、その瞬間。自分自身でも理解できない怒りに駆られて、ギブズはステイヴィーの襟をつかんで船室の壁に押し付けた。

「ギブズ！」

「下がっている！ ……なんのつもりだ！」

慌てたKJが止めに入る前に銃を抜き、若い男の喉元に押し付ける。哀れなステイヴィーは声を震わせながら、あー、うー、としまりのない唇からうめき声を漏らしていた。

お笑い草じゃないか、ワイラード？ もう一人のギブズが後ろに立って、この滑稽な愁嘆場を眺めていた。哀れなステイーヴィー、やつを脅かしてなんになる？ 船長かミスタ・ヴァーロックか、好意で女をあてがってくれただけじゃないか。嫌なら抱かなければいいだけだ。ガキは好みじゃないってな。

「くそ……！」

お前はそんなえらい人間だったか？ 女を姦^ヤるのも、殺るのも初めてじゃないだろう？ お前がこのメスガキに同情しているはずがない。お前が今思い浮かべているのは……。

「黙れ」

目を閉じる。トリガーに触れた指に力がかかる。ゆっくりと撃鉄が起きようとした瞬間、誰かがささやいた。

「……彼を離してやってくれ、同志ワイラード・ワイラードヴィチ」

その静かな、不思議と落ち着いた声は、ベッドに座っている少女から発せられていた。

「誤解があつたようだ。銃を収めてくれ、可哀想に……怯えている」

「あんたが……」

拳銃に安全装置をかけてベルトに戻すと、ギブズは声の主、銀髪の少女の方に向き直った。

「あんたが情報提供者か？」

「あなたはそろそろ女を見た目で判断してはならないということを学ぶべきだね、同志中尉」

少女はギブズの顔を覗き込むように小首をかしげると、銀色の髪を揺らしながら穏やかに

笑った。

「あんたも……艦娘なのか？」

「そう。ここではヴェールヌイと呼ばれている。よろしく、ギブズ中尉」

嗚然とするギブズをよそに、銀髪の少女はベッドから降りると、壁際で肩を震わせたままう

ずくまっているステイーヴィーの傍らに屈み込み、腕の中にその頭を抱いた。

「大丈夫だよ、ステイーヴィー」

「うう、うう」

「もう怖いことはないよ。ミスタ・ギブズはカウボーイごっこをしていたんだ。ヒヒーン、バンバン！ ほら、テレビでみただろう？」

やわらかな銀色の髪に毛布のように包まれながら、ステイーヴィーは少しずつ落ち着きを取り戻していた。

「ステイーヴィー？ この仕事は終わったから、ミスタ・ヴァーロックのところに行って、クレヨンを買っておいで。ミスタ・KJと一緒に行ってくれる。お茶とお菓子もあるかもしれないよ」

そのあやすような声を聞いていたステイーヴィーは静かにうなずくと立ち上がり、何事もなかったかのように部屋を出ていった。

「KJ、ステイーヴィーを頼むよ。私は同志と二人で話があるんだ」

「わかった」

KJが一つ貸しだぞこの間抜け、という目でギブズをひと睨みしてステイーヴィーの後を追っていくと、部屋の中にはギブズと少女……ヴェールヌイだけが残った。

「可哀想な子だ」

ステイーヴィーが出ていった先を目で追いながら、ぽつりと少女は言った。

「お姉さんが、ミスタ・ヴァーロックと結婚していたんだ。義理の兄弟なんだよ。だけど、爆発事故でお姉さんを亡くしてね」

「あんたにも弟が？」

なんとなくそんな気がした。

「……いたような気がする。艦娘になる前にね」

淡々と答える口調に落ち着かないものを感じて、ギブズがそれ以上何も言わずにいたり、ヴェールヌイは肩をすくめて笑ってみせた。

「すまないね」

「何がだ？」

「誤解させてしまったようだ。私が体を売っていると思ったんだろう？」

「……ああ。そうだ」

「あなたは紳士だね、同志」

愉快そうに微笑むと、ヴェールヌイは再びベッドの上に腰かけ、ギブズにも椅子をすすめた。

「こんな格好で男性の前に出ればそう思われても仕方がないが、どうにも暑いのは苦手でね」

「あなたにも誤解してほしくないが……」

人工皮革の破れかけた椅子の上に腰を下ろしながら、ギブズは大仰に手のひらを天井に向けてみせた。

「あなたに女性としての魅力を感じない、というわけではないんだ。同志ヴェールヌイ。これが仕事じゃなければな」

年端のいかない少女の姿をした、得体のしれない何かと二人きりで話しているという状況へ

の困惑を覆い隠すための虚勢に過ぎなかったが、彼女と話しているうちに、少なくとも軽口をたたくくらいの余裕は出てきていた。

「悪い気はしないよ。実際そっちの方の仕事もしないわけではないんだが……あまり機会がなくてね。この辺りでは需要が少ないらしい」

やや気まずい沈黙が訪れた。救いを求めるように視線を泳がせていたギブズの視界、ヴェールヌイがしどけなく座っているベッドの背後に模様が刻まれているのが映る。鉄の壁をひっかいて作った網目模様の上に、黒と白の磁石が並べて張り付けてある。

「それはなんだ？ GRUの暗号か？」

「これかい？」

肩越しに振り返りながら、ヴェールヌイは背後の壁を見た。

「碁ゴだよ」

「？」

「日本のゲームだ。もともとは中国から伝わったものだが」

「チエスみたいなものか？」

「見た目は似ているが、少し違う。この形は……」

白く細い指を伸ばして、ヴェールヌイは壁に貼られた磁石の位置を直した。三つ並んだ白い石が、黒い石に半包围のかたちで取り囲まれている。

「鶴ツルノスゴモリの巣ごもり、だね。『鶴は巣に閉じ込められた』という意味らしいよ」

「鶴……」

思いもかけないところから降ってわいたその単語が、ギブズに仕事を思い出させた。

「二晩かけて打ち方を教えてあげてもいいんだが、彼女の話をしに来たんだろう？ 同志ミハ

エリスから聞いているよ。そういえばヴラデーミル……ミハエリスは元気になっていたかい」

「一度会っただけだが、ひっきりなしに煙草を吸っていたな」

「しようのないやつだ」

出来の悪い弟を心配するような、愛情を含んだ声だった。見た目から想像できるよりもずっと長い付き合いなのだろう。

「瑞鶴の居場所は教えられる」

「どこだ？」

「アンダマン諸島の北の外れ、北センチュリオン島だ」

「インド領内だな？」

「統治機構は存在していない。島は独自の言語を話す先住民が暮らしていて、インド政府は島内に不干渉だ。外部の人間が上陸すること自体禁止している」

頭の中で周辺地理を描きながら、ギブズは航路を目算する。ビルマ、東パキスタン……ベンガル湾は領有権が入り組んでいる。おまけに東パキスタンは独立紛争の真っ最中だ。覚悟はしていたが、やはり楽な仕事ではないらしい。

「……そこにいると、どうしてわかる」

「当人から聞いた」

「は？」

天井を仰いでいたギブズは、危うく椅子から転げ落ちるところだった。

「どこで」

「あなたが座っているその椅子でだよ」

ヴェールヌイは膝の上に肘を置いて手を組むと、打ち明け話をするように身を乗り出した。
「半年前、ラオスを経由してソ連とキューバの『合同友好サッカーチーム』がこの島を訪れ、貨物船からヘリに乗り換えて彼女の王国を探しに向かった」

「それもミハエリスが？」

「GRUは関係ない。ジェルジンスキー広場から来た間抜けたちだ。そのソ連人顧問に率いられたキューバの傭兵どもは、この島を拠点にしばらく彼女を探していたが、櫛の歯が欠けるように一人減り、二人減りと消えていった。最後の一機、ヘリコプターに乗った捜索部隊が連絡

絶って二週間、ある朝ミス・ヴァーロックと私が窓の外を見ると……あの大きな尻ヒップが砂浜にあつて、彼女がいた」

「写真はないのか？ その時に撮らなかつた？」

「ない」

ヴェールヌイは膝を組み替えながら、鷹揚にかぶりを振った。

「あなたが渡されたものと一緒だ。顔も姿も変わっていない。撮る意味がない」

「それで、ここで話をした？ 何を話したんだ」

「なかなか質問が上手だね、同志中尉。SEALsで銃を撃つより尋問担当官のほうが向いているんじゃないかな？」

まぜつかえすヴェールヌイにあえて反論はせず、ギブズは続きを待った。

「大した話じゃなかつたんだ。ここで茶を飲みながら碁を途中まで打って、餞別がわりにと言つてあのヘリコプターをおいていったよ……それで、彼女は帰つていった」

「帰った？ どうやって」

「忘れたのかい？ 私たちは艦娘^{フネ}だ。海の上を渡るなど造作もないよ」

くすくす、と男の無知を許すような笑みを浮かべながら、少女はつづけた。

「なあ、あんたは……あんたが艦娘なら」

ぞくり、とギブズの背中に悪寒が走る。蒸し暑いはずの部屋の空気が、まるで冷凍倉庫のよう
に冷たく、鋭く感じられた。

「あんたが艦娘なら、なぜ彼女の情報を俺たちに教える？」

「うまく説明できないけれど……信頼してもらおうしかないね」

困ったようにヴェールヌイは目尻を下げながら、口を結んだ。

「わかるんだよ。……彼女は待っているんだ」

「待っている？ 何をだ」

「誰かが安らかに眠らせてくれるのを。あなたと同じさ」

「……俺……？」

「最後に酒の力を借りずに眠ったのはいつだい、同志？ 酔うためではなく、ちゃんと味わって酒を飲んだのは？ これでもウオトカの匂いには敏感でね」

スリッパの下から覗く、小枝のように細い膝をとんとんと軽く手のひらで叩いて、ヴェールヌイはギブズを招^よんだ。

「おいで、同志」

誘われるまま、ギブズは海水と皮脂でべたついた頭を膝の上に預けて、船室の天井を眺めていた。通風孔から低い唸り声を立てて、もったりと生ぬるい空気が流れ込んでくる。

「……ラオスだ」

小さな、柔らかな手が垢じみた額に触れる。まるで昨日このように生まれて来たばかりのようになめらかな、汚れの無い手。頭蓋の内側にこもった熱を吸って逃がしていくように、ひん

やりとして心地よい。

「北の将校を追っていた……俺たちは、村を襲った。燃えている藁ぶき小屋の中には標的はいなかった。女がいた」

目を閉じる。臉上に浮かんだ顔は、記憶が崩れた黄身のように混濁して、判然としない。あのラオスの黒バジヤマの女。写真の中の河津大佐……あるいは、ウィラードが海軍にはいると告げたときの母親の顔。

「焼け落ちた村の中で、相棒はその女を連れて行こうとした……俺は反対した。口論しているうちに、女が隠していた手榴弾のピンを抜いた」

その瞬間の女の目がまざまざと思い出された。あきらめたように、憐れむように、あるいはすべてを受け入れるように、じっとギブズの方を見ていた。

「女は嫌いだ」

みんな同じだ。青、黒、茶色……瞳の色は違ってても、そこに浮かんでいるのは同じ憐れみと

あきらめの色だ。

「相棒は俺をかばって死に、結局勲章をもらい損ねた。ベトナム領内での戦闘だったら、今頃基地の食堂か輸送艦にあいつの名前がついていたところだ」

思い出そうとして、その相棒の名前を忘れかけていたことにギブズは気付いた。どんな顔をしていたっけか。

「俺は入院し、頭の中に鑄鉄のかけらを埋め込んだまま戻ってきた」

「これかい」

「ああ」

黙ってギブズの顔を見下ろしていたヴェールヌイが、指の腹で額に残るみみずばれのような肉色の傷跡を撫でた。口に出してみれば陳腐な話だ。インドシナだろうと、どこの戦場だろうと起きているありふれた悲劇。運命的なところは何もない。肝臓を痛めてまで酒で紛らわすほどのものでもなかった、今にして思えば。

「同志」

じつとギブズの目を見ながら、ヴェールヌイがささやいた。しなだれかかる髪に隠れて、その表情はよく見えない。

「覚えていてあげてほしい。彼女のことを」

子供をベッドに入れて明かりを消す母親がするように、少女の唇が額の傷にふれた。

「そして私たちのことを」

そのままギブズは眠りに落ちた。